

## 直筆一枚物と一枚摺

——手銭家所蔵資料紹介（七）——

佐々木 杏 里  
（手銭美術館学芸員）

### 摘 要

出雲市大社町手銭家に伝来する文芸資料の中から、「手銭家所蔵資料紹介（四）」（六）に続き直筆物と一枚摺を紹介する。これらの資料は江戸時代の大社における文芸活動の実態を見る上でも、地方における文芸享受の実相を知る上でも、多くの示唆を与えてくれる。

キーワード…一枚摺、俳諧、和歌、杵築文学、手銭美術館

### はじめに

ひき続き直筆物、摺り物を紹介する、今回紹介するのはこれまで紹介していない資料、並びに昨年から今年にかけて確認した資料である。

79、81、82は、「一枚」という定義からは外れるが、「摺り物」である。72は直筆物で、歳旦等のテーマはないが、82、83と同じく中秋の名月にちなんだ吟行であり、「良夜吟」という題がつくところから、

82や83のような形式の摺り物にするための下稿であったのではないかと推測される。

65、71は、漢字と仮名づかいのみを少し変えた一枚物が、2枚ずつ伝来する。そこで、資料番号は二つ記し、翻刻は一枚分のみ挙げた。83は、スレにより判読不能な箇所が多く、不十分な翻刻となつてしまった。

### 〈凡例〉

直筆物、摺り物に分け、それぞれ概ね所蔵資料番号の順に、「手銭家

直筆一枚物と一枚摺―手銭家所蔵資料紹介(七)―(佐々木杏里)

所蔵資料紹介(四)、(五)・(六)〔二〇一九、二〇二〇、二〇二一〕に  
続けて通し番号をつけた。

通し番号に続けて、分類(和歌、俳諧などの別)、所蔵資料番号  
(No.)、資料寸法、資料情報(袋、など)、作者本名(地域)、制作年、  
翻刻の順に記した。

翻刻にあたり、私に句読点を補い改行も適宜改めた。概ね通行の字体  
に改めたが、一部原本の表記を残した。

一行空き、空行に記された「○」「」等はそのまま残した。

難読の箇所は□で示し、推定できる文字は「」で囲んだ。

落款はへで囲み、判読できた物については記した。

これ迄の調査の中で、おおよその制作年代が推定できる資料について  
はなるべく記した。

参考のため、原本の図版数点を最後に示した。

〔翻刻〕

● 直筆物

63 和歌 一枚物

No. T608-1

寸法 縦17・7cm 横12・4cm

作者 徳義(不詳)

袋 三節

江戸時代後期

春たちける日筆文のこゝろみに 徳義

ひきはへししもくの縄に音信て長閑に立るはるの初かぜ

いとなみのしけき中にもゆく年を、しむ心はわすれかねてき

野へに出て引やふた葉の小松にもこもるは千代のみとり也けり

64 和歌 短冊

No. T608-2

寸法 縦 36・4cm 横 6・1cm

作者 徳義(不詳)

袋 三節

江戸時代後期

三節

もろ人のことほきいはう言の葉にはなさきぬへき春は来にけり

このはるはかすむ野つらに庵しめて花うくひすに身をまかせてむ  
年波は井呑の濱にうちよせてかへる間はやみ暮にけるかな

65 俳諧 一枚物

No. T866、T1047

寸法 縦16・5cm 横21・8cm

作者 南天(不詳)

江戸時代(宝暦〜天明頃)

南天

草庵の春を迎へて

来る春のこゝろのともや杖と笠

歳暮

市人に押されて遊ぶ師走かな

春興

雑水をすゝれは匂ふむめの花

〔南天翁〕

66 俳諧 一枚物

No. T1031

寸法 縦17・2cm 横22・5cm

作者 不詳

裏に「御上辰御三節」

江戸時代

両節

あかほそや昏燭もて見る懸想文

貌を探る梅はいつこそ臂折廊

煤掃や壺さうそくの后町

青柳や龍頭鶴首河水楽

67 和歌 一枚物

No. T1033

寸法 縦16・2cm 横32・7cm

作者 嶋重功(杵築)

江戸時代(明和)天明頃

嶋重功

広瀬のぬし長崎の旅の舎をとひ来まし、節、たとへむものなくう

れしかりしも、唯しはしにて立帰給ふ名残を惜みて

旅ころも□ちて見に来し長崎に長居はをすて帰る君かな

つ、かなくかへりきつきの大宮に吾つきはひも祈りかけてよ

又古郷人に消息を送るとて

直筆一枚物と一枚摺―手銭家所蔵資料紹介(七)―(佐々木杏里)

玉の□に玉もこかねもひろひつゝ、いまかへりくとつたへてよ君

68 俳諧 一枚物

No. T1038

寸法 縦16・7cm 横16・0cm

作者 直路(不詳)

安永6(1777)か天保8(1837)

丁酉歳旦

春宮の花々しさに門戸を開らけて

豊かさや日にうるはしき宿の春

申せいほ

齢ひ八十字にあまれる母の健かなりければ

としの坂越ゆるちからや母息子

春興

藪蔭はまた雪深し梅の花

右

直路

69 俳諧 一枚物

No. T1042

寸法 縦27・6cm 横31・5cm

作者 平井閑二(博多)

江戸時代(文化文政頃)

白澤うしの芳戸を推敲し侍り林言の眉をひらき薄氷の交りをなし

まいらせ雅談に及へは百たらず、山田の庵の蚤しらみ、海士の管

家の生くさきとまりくのうきす、いつしか一声の笑ひと成侍て

四三

百里来て我忘れたりほととぎす

右 つくし 歸来 拝〔歸〕へへ

70 俳諧 漢詩 一枚物

No. T1043

寸法 縦16・6cm 横33・9cm

作者 波濤(不詳)

文化14(1817)

〔岡詠軒〕

試筆

新年先勸椒花杯

四海今朝春色来

處々惠風梅柳発

黄鶯竹外暖光催

元朝や兒に詰ひせるにほひ酒

鶯の呼のはしたる日和かな

丁丑春吉辰

波濤

〔濤〕〔濤〕

71 俳諧 一枚物

No. T1045、T1048

寸法 縦19・5cm 横20・2cm

作者 葉山善右衛門(六道)

江戸時代(寛政頃)

へへ

歳旦 奇盛

梅生て屠蘇とにおひをくらへけり

年晩

行としや鯛来る夜への灯に丁子

年内立春

年木こる人にしれつゝ直きらす

庵庭に遊ぶ

みそ汁にんめ摘入つ庵の節

春興

新田のつゝみはすくにやなき哉

〔距錦庵之印〕〔奇盛〕

72 俳諧 仮綴じ一帖

No. 546

寸法 縦21・8cm 横28・9cm

作者 手銭兵吉郎(杵築)、寿山(不詳)

江戸時代(延享〜天明頃)

〔表紙〕

良夜唼

〔見返し〕

良夜唼

なへて世に見るものひとつけふの月

名月や昼見ぬ物の眼にかゝり

こよひは名にしおふ秋の最中なるに、昼のほとより雨しはく降

冠李

寿山 一才

て、さし出る月の光をつゝむ。彼の言珠を測にかくすもかくやあらんと詠侍るうち、初夜の鐘かふくと告渡る頃、漸雲の戸さし折くひらきて晴曇幾たひかもしらす、そゝろに筆を染て其あら」<sup>一ッ</sup> ましをのはへ短歌の一興を催し侍るならし

短歌行

雲間待こよひ百夜の月見哉

通ふ小男鹿庭の真萩に

呑馴ぬ新酒に鼻をはちかれて

侍に寝た子の起て這出す

ウ

降さした「物」をそこらに取散らし

漏あてる間に過る夕立

四五本の竹を雀の嬉しかり

今に大工の音のかちく

煤掃や餅搗まへのいそかしさ

灸すへるとは嘘な宿入

山里の花も咲しと言てこし

春の内から裕てもよき

ニヲ

行雁も霞隠れに友呼て

沖の出舟を招く乙女子

寝乱れし髪も記念と其俣に

手水にさます顔のほやく

朝ほたれ風が替りて懇ほめき

近道しても秋の日短

冠李

寿山

々々

李

ウ

李

山

々々

李

々々

山

々々

李

ウ

々々

山

々々

李

々々

山

「三才

須磨の月並ふ明石は余所にし

むかし語りに露のたまる手

ナウ

子を持てはいやまし深き親の恩

喰ふたふりにてつゝむ一品

金屏の光もしらむ花盛

盃流す□のかけはし

(見返し)

山

山

山

李

筆

73 摺り物 一枚摺

No. T1013-1

寸法 縦 9.1cm 横 26.5cm

作者 春濤(不詳)

文政7(1824)か?

甲申のとし

聖節

今朝のはる箒も入らぬこゝろなり

晩年

め枯臥す中に四極のあらしかな

春興

またたれも折らてうれしや畑のむめ

、

74 俳諧 一枚摺

No. T1013-3

寸法 縦17・7 cm 横24・6 cm

江戸時代後期

丑の梅見月楼庵にて

梅真白我侘家とおもほえず

うめか香やよこれ通る旅の人

しら梅や夜を遅しとおもふまで

舟造る所定めやうめの花

北風の梅に明たり古障子

寢覚するたのみも梅の咲てより

くれ竹はうつきり松し梅の花

梅か香は月夜心か門の闇

雨ふるもはるゝも丘の梅一本

人去や来るや梅散江の空へ

梅白し田々は守ると里の声

俳諧のわすれ草かな梅の花

川水も千鳥もかふれ梅の風

旅坊

を日にむけて

大根の花二月ぶる嵐かな

東君

ひとゝきの風芸をはらひ捨て、としのなこりのまくら引よせ、眠

りの花をふきおくるあらし

おそろしき夢はさめたりはつからず

歳軸

夕かねもはるまつものゝひとつかな

春興

青柳や背門のなかれは米の水

麦菜たね十里のみちか暮ぬなり

酉のとし

作者 奈良井元朝(松江)、春濤(不詳)

江戸時代(文化文政頃)

東君

ひとゝきの風芸をはらひ捨て、としのなこりのまくら引よせ、眠

りの花をふきおくるあらし

おそろしき夢はさめたりはつからず

歳軸

夕かねもはるまつものゝひとつかな

春興

青柳や背門のなかれは米の水

麦菜たね十里のみちか暮ぬなり

酉のとし

76 俳諧・俳諧の連歌 仮綴じ一帖

No. T1015-2

寸法 縦18・8 cm 横12・5 cm

江戸時代後期(天保頃)

(表紙)

机の浦に春を迎へて

行わたるうらのはつ日やさゝら波

船から汲におりる若みつ

うくひすの居りて似合わぬ枝もなし

古ひし庭の月のしつかさ

ひや麦ハちと唆しきひかり成

東君

ひとゝきの風芸をはらひ捨て、としのなこりのまくら引よせ、眠

りの花をふきおくるあらし

おそろしき夢はさめたりはつからず

歳軸

夕かねもはるまつものゝひとつかな

春興

青柳や背門のなかれは米の水

麦菜たね十里のみちか暮ぬなり

酉のとし

76 俳諧・俳諧の連歌 仮綴じ一帖

No. T1015-2

寸法 縦18・8 cm 横12・5 cm

江戸時代後期(天保頃)

(表紙)

机の浦に春を迎へて

行わたるうらのはつ日やさゝら波

船から汲におりる若みつ

うくひすの居りて似合わぬ枝もなし

古ひし庭の月のしつかさ

ひや麦ハちと唆しきひかり成

東君

ひとゝきの風芸をはらひ捨て、としのなこりのまくら引よせ、眠

りの花をふきおくるあらし

おそろしき夢はさめたりはつからず

歳軸

夕かねもはるまつものゝひとつかな

春興

青柳や背門のなかれは米の水

麦菜たね十里のみちか暮ぬなり

酉のとし

75 俳諧 一枚摺

No. T1013-6

寸法 縦19・8 cm 横26・6 cm

了[匡]

〓〓〓

東君

ひとゝきの風芸をはらひ捨て、としのなこりのまくら引よせ、眠

りの花をふきおくるあらし

おそろしき夢はさめたりはつからず

歳軸

夕かねもはるまつものゝひとつかな

春興

青柳や背門のなかれは米の水

麦菜たね十里のみちか暮ぬなり

酉のとし

76 俳諧・俳諧の連歌 仮綴じ一帖

No. T1015-2

寸法 縦18・8 cm 横12・5 cm

江戸時代後期(天保頃)

(表紙)

机の浦に春を迎へて

行わたるうらのはつ日やさゝら波

船から汲におりる若みつ

うくひすの居りて似合わぬ枝もなし

古ひし庭の月のしつかさ

ひや麦ハちと唆しきひかり成

東君

ひとゝきの風芸をはらひ捨て、としのなこりのまくら引よせ、眠

りの花をふきおくるあらし

おそろしき夢はさめたりはつからず

歳軸

夕かねもはるまつものゝひとつかな

春興

青柳や背門のなかれは米の水

麦菜たね十里のみちか暮ぬなり

酉のとし

76 俳諧・俳諧の連歌 仮綴じ一帖

No. T1015-2

寸法 縦18・8 cm 横12・5 cm

江戸時代後期(天保頃)

(表紙)

机の浦に春を迎へて

行わたるうらのはつ日やさゝら波

船から汲におりる若みつ

うくひすの居りて似合わぬ枝もなし

古ひし庭の月のしつかさ

ひや麦ハちと唆しきひかり成

東君

ひとゝきの風芸をはらひ捨て、としのなこりのまくら引よせ、眠

りの花をふきおくるあらし

おそろしき夢はさめたりはつからず

歳軸

夕かねもはるまつものゝひとつかな

春興

青柳や背門のなかれは米の水

麦菜たね十里のみちか暮ぬなり

酉のとし

松朗 介居 朗 居 朗

河苧にかりし家のうつくし  
 こんもりと鐘の聞ゆる臨川寺  
 旅の間は恋もわする、  
 きぬ／＼の昔を思ふ土用干  
 よほとくらしのはりし十袷宜  
 遠山はまた雪ながら花催ひ  
 一日／＼に見えるうらゝか  
 元日の木ふりもあるや梅やなき  
 御峰や肩かさ／＼と人の行  
 人の灯ハ去年のあかりやはつ鳥  
 萬歳のまゝよ襖の明はなし  
 蓬萊の床にあまるや夜の影  
 奥は手もさせぬ深雪や小まつ曳  
 余所からは我もかすむか小松曳  
 夏へた暈の寒き睦月かな  
 春もまた梅にのみたつ日数かな  
 梅咲や雫もおちぬ家根の雪  
 うめかゝかもそふや野風の吹返し  
 吟となく風にしたしき柳かな  
 暮るまで柳は青し雨の中  
 紅葉もさかりに近し鳥の声  
 美しう白魚に灯のうつりけり  
 雉子啼やはらりとこほす草の雨  
 来る蝶の没けらしさよかけ簾  
 喰て来た菜長々し親雀

居 居 朗 居 朗 居 朗 生々 馬得 風外 喜蕉 鳴々 梅通 仙峰 蓬宇 宅頼 殖雨 洋々 此楓 桐亭 竹齡 露白 帟斐 和年

朗 1ウ  
 朗 2才

月させハ猶こまかなり春の雪  
 とかくしてけふも過けり春の雨  
 ゆつたりと夜汐もさすや春の月  
 京遊や筏を流す昨日けふ  
 た、居ても居らるゝ此の日永哉  
 京人に問事多き□□<sup>虫掛</sup>  
 しほらしき色や我輪の花萼  
 山吹や岩間をつたふ水のおと  
 山吹に露見る影や茶の使  
 花と氣のつくまで寒き禁かな  
 明すゝむ夜やひら／＼と花のちる  
 雨はれて花に猶予もなかりけり  
 常磐木はまた夜をこめて桜哉  
 山間や小寺の庭の遅さくら  
 夏来てもかへぬ簾や須磨の里  
 時鳥旅かとおもふ寝覚かな  
 蚊張たゝむ風とゝきけり八重葎  
 封されは箔のこぼるゝ扇かな  
 秋になる麦やひと雨一日和  
 けしの咲中に過行日数かな  
 けしは皆一重に咲ぬ庵の畑  
 風少しひらくはかりの牡丹哉  
 青いにもいろ／＼のある若柴哉  
 捨はたけ藪になれとやことし竹

鶉巢 鶉巢 帶棠 卜隣 □雨 都處 筍厂 笠洲 如杵 白崖 秀然 素文 柳崖 松喙 露菽 寬節 雪塙 北雉 □火 介居 雨哉 涼峰 鶉楼 梅塵

朗 2ウ

水打たのちよ夏菊見るこゝろ

都雨

植る「場」のなくてほしや庭に竹

梅裡

「3才

薄きるうちに消けり朝の月

竹恵

板「橋」に水ひたくや啼くひな

小仙

落さうに見へてそれ行螢かな

五朔

水すちはみな田になりてとふ螢

梅處

暑き日のうれしきものや下り坂

扶葉

見て行も暑し在所の瓦葺

梅山

大川の末や涼しき二日月

塙夕

舟曳の水際ふんて雲の峯

□<sub>虫撰</sub>□<sub>虫撰</sub>

帷子の色より白し雲の□<sub>虫撰</sub>

柿玉

入川やさゝ波見へてけさの秋

柳之女

「ともすれの音に秋たつ小「笠」哉

曲川

夕月や竹の中より初あらし

松逸

露おくや水すれくの艸にまで

方月

しら露や野は一色の夕けしき

筆秀

「3ウ

朝顔や此涼しさも今のうち

完伍

ひとつらに芒花さく廣野哉

竹人

こと伝を萩の外から届けけり

帰木

旅人の眼につきあし秋のてふ

竹韻

竹掾やもれて聞ゆるきりくす

而石

道つれに成てやさしやすまひ取

秋圃

青空や明ことにして秋の□<sub>虫撰</sub>

松湖

よそに寝て我家なつかし秋の雨

□<sub>虫撰</sub>水

ちからにも哀にもきく砧かな

飛節

夕栄や花野に高き塔のかけ

雨川

更行や月の光の袖につく

柳塘

雲散て月に寝のこるひとり哉

塘雨

名月や廣うにおもふ一座敷

恒女

月の雲たえまくのななめ哉

墨雨

夕月や海のうちへ行雁一羽

松裳

思ふ事忘れけり茗のこえ

臥龜

鳴なくや夕日の赤き雜木山

耕雨

こしらへた流と見へし添水哉

岸女

菊の香の寒うなりけり雨の□

楽哉

一はたけ垣の外にも小菊かな

烏石

菊の香やふ郎掃除のとく家

松坡

水に見るこゝろはつかす後の□<sub>虫撰</sub>

□<sub>虫撰</sub>□<sub>虫撰</sub>

川こえて柳にはるゝ時雨「哉」

効我

凧を片帆にうけて汐けふり

恵山

散木の柴半道暮てもとりけり

有洲

燃しさる間もなくくへる落葉哉

含植

枯てから大きくなりぬ萩の声

榛清

水に澄朝月細し枯やなき

万左伎

日のさして畳もぬくし帰り花

都恵

水上も見ゆる筧や冬木立

前路

其侍の家も淋しや冬木立

都几

鐘氷るころそ月夜の東山

野柳

「4ウ

「4才



さ、波のまゝに汀の水かな  
 青もの、氷ふるふや朝の市  
 かれくし流れに冴る月夜哉  
 冬の夜やこほれさうなる早虫撰  
 水鳥や流るゝやうて元のところ  
 人の来る音や火桶の置ところ  
 はつ雪や重なる峰の一處  
 雪の川齡流れて暮にけり  
 灯火の見ゆるはかりや雪の里  
 つくり恃し橋や埃も有あたり  
 水仙の花猶白し寒の入  
 灯のかけも落つくさまや年の暮  
 鶯や舞子の茶屋の新めくり  
 みちるもはやき春の夕しほ  
 藪入の迎ひかてらに一里経て  
 日和つゝきに茸のまたもむ  
 風雲の□てしまひし朝の月  
 露にもぬかる峠の細みち  
 順礼のはくれし連に□□と逢虫撰  
 多賀の中路はよほと入込  
 約束はしても巨燧を別れかね  
 ありくもつゝき三十日の闇  
 仰向は顔にひらく花の夢  
 はるから艸のしける門山

貧風  
 巢宇  
 鶯和  
 芹舎虫撰  
 芳節虫撰  
 鶯川  
 佐都  
 掉梅  
 春曉  
 索田  
 萌池  
 松朗  
 三外  
 朗  
 外  
 朗  
 外  
 朗  
 外  
 朗

―5才

三度目の雪やさいはいとし忘  
 松朗  
 〔5ウ

77 俳諧 一枚摺

No. T-1016

寸法 縦37・9cm 横25・8cm

袋 「枝の戦」

江戸時代 天保4(1833)か?

菰着せて休て居るや早苗舟  
 ずゝしさや草引朝の出来こゝろ  
 小笹しく遠山台や水鏡  
 蚊屋を出てよく見まわせは人の家  
 薬玉や外へ向てもにほふ風  
 寝入せぬ雨にも減ぬ炎串哉  
 蚊のとつを追行里の手觸哉  
 往還の見えて出にくし床の中  
 時鳥よほと更たる棹の露  
 裕着て筆先軽うおもひけり  
 打水のうへに納まる埃哉  
 きつはりとした朝晴やせみのこえ  
 月を待つほととの奢や夏まつり  
 卯の花や垣に消たる二日月  
 地につもるものならいかに五月雨  
 出る船にせつかれて着る裕かな  
 かたひらや肩にこたえる敷松葉

岱年  
 梅石  
 九起  
 梅室  
 乙人  
 春外  
 先頼  
 梅年  
 有芳  
 仙峯  
 梅里  
 鶯先  
 伊菜  
 さの女  
 一村  
 巴水  
 鳳居

葉裏の八大明里するほたるかな	、	李庭
老なから鳴鶯のいさみかな	、	塩冶 廣居
拌み処のあるやうてなし苔の花	、	南經
棲からけ□ <sup>出</sup> な子の中通りけり	今市	有月
雨雪にうつろひ安し紅の花	、	美喜女
枝ともに折て戻るやかたつむり	、	た恵女
月の出を見込に置やす、み台	、	左得
人並に着れと小寒し初裕	大社	凡和
温泉旁れの眼はまた覚す五月雨	、	起友
雲かけになるや眼につく合歡の花	、	有十
蜘蛛の巣を拂ふや朝の若楓	、	外山
戸明ればすくに啼けりほと、きす	、	梧谷
川影によし風吹や行々子	、	白亀
着かさりし人も眼立ぬ牡丹哉	、	涼竹
せまけれと我背戸は皆わか葉かな	、	青坡
年借は都言葉や麦の秋	、	一水
水に名のある処なりところてん	、	加水
斧屑の足にさはるや夜の露	、	草悦
顔に墨付ても居らぬ鍋まつり	、	馬陽
見はらしの青田植むら見えにけり	、	南菜
ついに日のさ、ぬ小溝や苔の花	、	南向
行燈の向かへて置す、みかな	、	南里
卯の花にし□ <sup>出</sup> むや藪とやふ隣	、	南洞
ありなしの月や蚊の舞ふ庇口	、	南雅
往還にひと夜こさすやあまり苗	、	南逸

かいわいに松のすくなき若はかな

○

枝川の末はほたるのさかり哉

巳の夏

78 俳諧の連歌

No. T1036

寸法 縦17・1cm 横46・8cm

作者 桜井能充(加賀)、扇暑(不詳)

江戸時代(文化文政頃)

門ふたつあれはひとつは梅の花	、	雪雄
ほろ／＼土のかはくきさらき	、	扇暑
雛子の恋いくらも聞は猶へりて	、	雄
風呂たくつふ手いつもふろたく	、	雄
鬼灯の□葉にすれる月の前	、	暑
露がふらねはねむけさすなり	、	暑
秋の風十三佛の茶湯とき	、	雄
鼠の尻の白き家根うら	、	暑
雑夜寝するむしろを宵に置いてやり	、	雄
板木のもととは恋の二道	、	暑
鳥にもあなとられたるいちこ売	、	雄
鶉飼の宿へ□をさしこむ	、	暑
はさ／＼に月の様る、山のこし	、	暑
何つかんでも秋の七くさ	、	雄

濃たらす宇治から先は祭にて  
 あの小男の高足駄見る 暑 雄  
 温泉かへりの夕日に花の咲かゝす 暑 雄  
 田にしすくひのなき家もなし 雄

79 和歌 一枚摺

No. T1040

寸法 縦15・2 cm 横21・5 cm

作者 日々庵浦安(杵築)

天保14(1843)か?

ことし七ツ目なれば

卯はとしのなゝつ目出度春をへてあそふ果報の耳の長き日  
 いろくの花を是から見せんとて霞の幕をはるのうらゝさ

素鷲の宮人(日々庵)〈浦安〉

80 俳諧 一枚摺

No. T1046

寸法 縦17・9 cm 横23・3 cm

江戸時代(寛政)文化頃)

申六月十一日開卷

奉納翁堂

十萬句第四会二万一千五百餘輯

巻首

直筆一枚物と一枚摺―手銭家所蔵資料紹介(七)―(佐々木杏里)

夏三月是に尽たりはつ嵐 備玉江社 螢雪  
 うら盆や皆ともし火にさす月夜 青龍社 夜来  
 閑子鳥竹垣こけて海見事 長流社 三霜  
 夕浪の風素通て春寒し 讚筈居 柴峯  
 猿曳の猿の子なり宿の春 長流社 螢雪  
 書初や書た通りの春になる 長流社 梅鳥  
 三日月はない物にして啼蛙 奥津□ 青牛  
 山の井の水なと汲て玉祭り 江東社 東后  
 菊作り有て一村きくの花 伯テマ 蝸雉  
 花のさく時月の出る榊かな 長流社 二中  
 右十産余略

ひとつ葉の小清水ところく哉 選者 正風道場

81 俳諧 仮綴じ一帖

No. T1049

寸法 縦16・1 cm 横21・5 cm

作者 三刀屋連

文化14(1817)

(表紙)

雲陽

三刀屋連

文化十四丁丑神在月

去年の初冬終□の折からいとなみおける草稿を取しらへて、この一周忌に「梓」にちりはめ諸風士へ「聊」作善の心さしを告るものならし

「一ウ

四季

亡人

馬秣園東明

雇人の白酒挽や春の雨

合歓咲くや滝にうたる、荒法師

露おひておもき姿や雨の萩

声つかふうき世気はなし寒念仏

右

追善

おのゝ前書畧

魂やさそ本来し道へ帰り花

おもかけの白髪仰らむ塚の霜

見へぬ目も塚にかけろふ小春かな

生には愛嬌をことゝし、死には哀戚をことゝすと古人の謂なりける哉。きのふけふとはおもはざりしか、はからすも神在月六日、

父の君の忍土をさり「ニッ 給ふに、子として孝のはしくれた

になき身を今さらおもひ出し、悼前に感涙をもよふすのみ

明き魂や次第に寒き一日つ、

露静斎

更月拝

歌仙行

おくれゝ行や時雨の夕鴉

手つから蕪引に精進日

荒壁をぬれば普請も唄入れて

古ひ小判の直かしれぬ也

古ひ小判の直かしれぬ也

有明の月夜も下す新酒舟

紅葉いろつきかけは沼鮎

ウ

初心にも秋は連歌の口ほとけ

太秦辺に我は織立

友かへは小石高なるわかれ道

俄にかはる風のあやしき

抱籠にほこる大臣の昼寝さめ

月毛の駒をつなく葉柳

賽の目のころひ兼たる竹筵

舌いたみつゝ、たはこ呑切る

間違の想にふけ行鐘の声

名残の霜の跡見すに降

眠るらんうらなき花に佛の

静る釜に春を観る□<sup>出掛</sup>

右

各縁

稲舟に乗せてわたすや琵琶法師

麦波にせまいなかれや杜若

碁に更て戻る籠やしかの声

塵塚のちりを詠めや霜の朝

夜もすから病齒にしむや萩の声

石好きのたつて暮すや啼河鹿

○

山神の娘の袖やはつ紅葉

直以

亀六

女とも

知雀

逸甫

龍水

東庵

李明

白羽

滝流

鳥夕

眠考

南湖

筆

給下

南湖

白羽

東庵

龍水

逸甫

李明

真郷

秋風や木喰の眼の底光り

喜朝

こき交せて空も錦や八巾

女とも

鮎釣や素縄引き□明の月

滝流

梅見から迷ふたふりの嫁見哉

鳥夕

藪入や庄屋の内義の灸の伽

眠考

寺もまた世の外ならし燕の巢

更月

宿かりの茶を立出すや須磨の月

知雀

五郎四郎は芋の子守りや月の□蟲

亀六

牛の子に華のはれけり活大根

維中

神官東明翁の一周忌をとふらひまいりて

昨非坊

塚ふるや夢一とせの初しくれ

京橋二刀

82 俳諧 仮綴じ一帖

No. 131

寸法 縦18・8cm 横13・4cm

作者 広瀬百羅社中

寛政9(1797)

(表紙)

良夜喰

(見返し)

(印)

寛政九丁巳歳

八月十五夜

日御碕連

海原や雲なき月の見るめなを

種水

闇霧もひかりに濁しけふの月

鬼外

名月の玉やこよひは素顔ても

迂川

月今宵うさをは捨の山ならて

吐雲

名月や戸をたゝく人夜もすから

楚天

名月や客を饗応す庭の面

和泉

名月や富士の煙りの行衛なを

孤松

名月や舟から運ふ酒肴

花鳥

早稲苺て落つき顔の月見哉

柳之

名月や我影までも美しき

笑水

寝られぬとさすか今宵の月なれや

寄松

瓦家も玉のひかりやけふの月

如蜂

名月にひとり雨ふる柳かな

寿音

酔さめて見れば昼かどけふの月

如松

名月のひかりハ妬む雲もなし

□教

山の端も逃よこよひの月の道

可候

庵造も忍ひやとるゝ月見かな

荷生

名月に寝て居る人を起こさはや

渡月

名月を待行し秋ハ一夜かな

関山

けふといへは磯の女辻も月見かな

重

名月やこよひは雲も忍けり

久

名にしおふ月はくもらぬ鏡かな

市

誰か寝んいつくも月の秋ひとよ

結

名月や行衛はるかに籠の鳥

楨

宇龍連

吉野まで見し人なれやけふの月

唐橋の雨もかひなしけふの月

名月や門しめさせて夜もすから

案山子かと行て□□れん月見哉

名月や芋ハ今朝からおこされし

難波からはも月見か帆かけ船

名月や笠はなけれと夜目遠目

名月やきのふから来る客も有

名月やあらせはしなの明の鐘

名月やあるかれそふな諏訪海

象潟に眠りもさめて月見かな

名月やみかゝぬ玉にひかりあり

松江連

名月や雁も折よく小田の原

名月やさなから留主も捨られす

平田連

無理ならぬ鳥の声やけふの月

さす棹の下手も又よし月見舟

鷺連

今宵唯月の形や須磨の浦

名月や各すまの宿泊り

宿かして客をつれ出す月見かな

柴の戸は影とふたりの月見かな

舟人もことたる夜ありけふの月

風知

花好

枝遊

亀遊

寿水

翁水

恵夕

関喜

瀬水

春山

可風

山酒

和光

可昌

寛志

桂水

芦舟

雨竹

鼠輩

仙里

友月

遠山も年に名はかりけふの月

唐橋や雨止んてから今日の月

名月や昼から泊る海人の家

杵築北連

名月やいよゝものを忍はする

皆酔てひとり醒たる月見かな

猿の名月やこよひの月ならん

明石とは常にもいへとけふの月

名月に船てさかつき拾ひけり

淋しさを伽にして見ん月の「留主」

同 西連

家はかり寝て居る町の月見哉

叩戸に月見の留主と答へけり

名月や寝ぬ人ならば宿かさん

名月や手も叩きやむ寺の客

老の身は老を忘れて月見かな

名月に下見るもあり橋の人

同 東連

来ぬ人は月見て居るか夜の更し

又来るも月見をさそふ手紙哉

同 南連

夢の間やきのふの花にけふの月

名月や雁もこよひを渡りそめ

同 濱連

名月や矢立にも入る萩のつゆ

鷺眠

竹遊

石猷

亀口

龜山

波光

千翠

遊枝

雀子

不中

寿仙

梅子

仙花

仙里

烏夕

寸志

巴柳

扶月

呉竹

陰之

「二ウ

名月や玉かしつかむ草の露  
 橋越て影も笑ふやけふの月  
 名月や来る舟も又和哥の友  
 石山も哥に和らく月見かな  
 名月や影もうつむく道の友  
 名月や寝られはせぬと鳴からず

昏苑 南外 冬扇 東里 可笑 富三

「三才

同 女連

みちく／＼てかけぬ内にと月見哉  
 名月やちりのうき世に夢もなし  
 天津風雲な起しそけふの月  
 かくれ家や花より後も月の客  
 女さへ出てあるきたしけふの月  
 名月や心ちらさす花の友

滋 久美 茶遊 道 千賀 露

同 月連

名月や闇にたとれる人は誰ぞ  
 名月や□直の風炉にちる柳  
 名月や鳴たつ硯のさゝ濁り  
 あたらしき友も出来たりけふのつき  
 くめともく／＼月に醒つゝ秋ひとよ

有秀 芦川 露丸 一毛 浦安

大かたは見るなどいひしかしこき人のことの葉も忘れて猶たりす  
 まの浦ならぬ爰のいなさの濱伝ひに  
 うかれ出て白髪恥かしけふの月 みの笠の「翁」

去十二日月次会

蓮の実の飛もなつかし水の音  
 袖にしくるゝ竹のしら露

あり秀 うら安

「三才

直筆一枚物と一枚摺―手銭家所蔵資料紹介(七)―(佐々木杏里)

よるは月昼は源氏に秋ふけて  
 つく／＼旅を忍ひやみけり  
 馬よりも舟のたよりのたしか也  
 あらめつらしの梅雨の春雲  
 いつくやら笛の聞ゆる伊勢神楽  
 近道すれはぬらすはき物  
 くるゝをもまたて築地の崩れより  
 名に立練く恋のしら波  
 一盛花のうき世とゆるせかし  
 うは気にならぬ春は色さへ

百蘿 一毛 ゆき丸 秀 安 蘿 毛 丸 安

仙菊亭 うら安集書

「四才

83 俳諧・俳諧の連歌 二つ折

No. 566

寸法 縦39・6cm 横53・8cm

作者 広瀬百羅社中

江戸時代(安永〜寛政頃)

老の身は内て見んとある人のいへるとも、こよひの清光に物忘れ  
 して、徳園の翁とともに爰の海辺に吟行す  
 須磨はいさいさゝの濱のけふの月  
 雁か唐槽か沖にすむ声  
 かさねたる袷に裾のおもたくて  
 銘酒のをはる身も「残」しけれ  
 よめぬ字のいかひ事あるなかり書  
 □の行燈かたらぬ大年

百蘿 巴龍 冠李 芦川 仙菊 一毛

今の間に二尺も雪の降りつもり

有秀

峨々たる山の雲に聳えて

箕山

さしもなき小城ひとつを責あくみ

波光

馬の病の源氏まちく

蘿

七つにはまたならぬ日の高泊り

川

唇ぬらす露の玉味噲

李

紅葉より先へ染たる□椒

毛

片側はかり店の夕月

菊

湯あかりに娘の素顔見とめけり

山

物のあはれも恋すれはこそ

秀

ちらぬまは花をかたとふ□瀬寺

李

蝶は春から薄着して飛

龍

下略

「オ

各詠

蒼海万里の渚光さえ一点の隈なし

老の波のよるを忘れて月見哉

徳園主人 冠李

名月や波にぬるとも磯伝ひ

巴龍

名月や光をちらす浪の花

芦川

名月や三瓶を富士といはみ渴

一毛

名月やより来る波もなみならず

波光

我かけの外みな白しけふの月

箕山

新月にとしく古き言葉哉

仙菊

名月や玉蒔ちらす浪の畝

有秀

なを独詠の句を聞あつめて

□(スレによりこの句判読不能)

□□を席にて白しけふの月

□

名月や行てもみたき海の果

春

山里も今よひは月の頻かな

鷺浦 芦□

す、みたる橋もなつかしけふの月

□□

我かけを連てほそく月見哉

仙菊

名月や我をともかと水からす

ちか

□(スレによりこの句判読不能)

□月や山をはなる、うつ高き

「梅」□

名月や見へても遠き人の声

雪□

名月や一間にくらき丸行燈

□□

鐘に出て鐘にわかる、月見哉

寿仙

〈園〉〈楽〉

「ウ

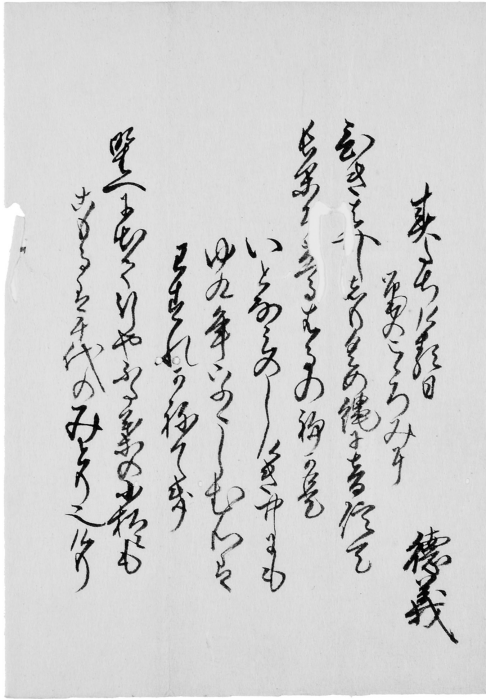
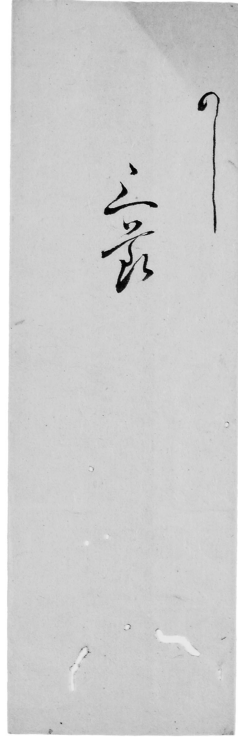
(付記)

本稿作成にあたっては、立正大学 伊藤善隆氏に多大なご助力、ご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰の文学・歴史関係資料の基礎的調査研究と発信・公開に関するプロジェクト」(二〇二二～二〇二四年度、代表・田中則雄)による研究成果の一部である。

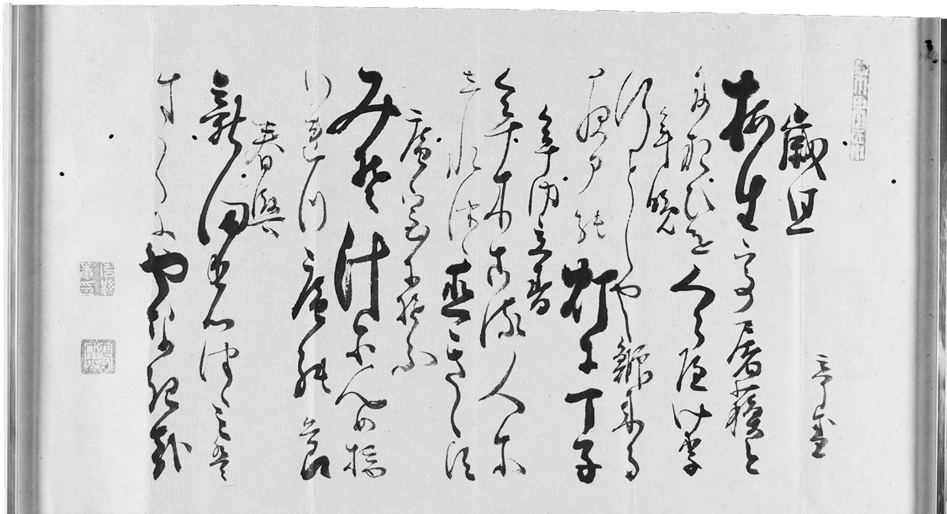


63 No. T608-1



直筆一枚物と一枚摺―手銭家所蔵資料紹介(七)―(佐々木杏里)

71 No. T1048





直筆一枚物と一枚摺 | 手錢家所藏資料紹介(七) | (佐々木杏里)



76  
No.  
T101512

# “Jikihitsu-Ichimaimono” and “Ichimaizuri” —reprint and introduction ; Documents of Tezen Family Archives (7) —

Anri Sasaki  
(Tezen Museum curator)

## [Abstract]

To reprint and introduce “Jikihitsu-Ichimaimono” and “Ichimaizuri”, following “Introduction of Tezen Family Archives (4) – (6)”. These materials provide us with many suggestions for observing the actual state of literary activities at Taisha in the Edo period, as well as for understanding the state of the enjoyment of literature in local areas.

Key-word; Ichimaizuri, waka, haikai, Kizuki-Bungaku, Tezen Museum,